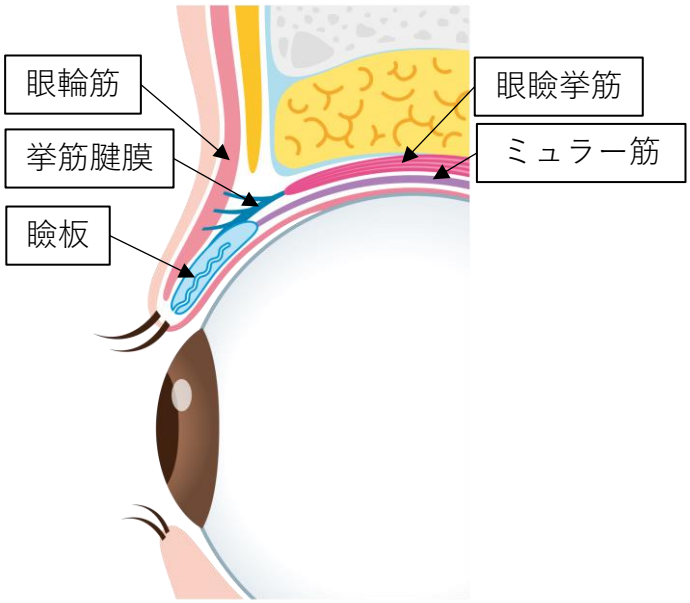
加齢性眼瞼下垂症

日本赤十字社 岡山赤十字病院
形成外科　杉山成史

形成外科で行っている眼瞼下垂症の治療についてご紹介いたします。



加齢性眼瞼下垂とは

加齢や長期間のコンタクトレンズ装用によって、眼瞼挙筋や挙筋腱膜がゆるんで瞼が開けにくくなった状態です。

症状

瞼が挙げにくいだけでなく、前頭筋で眉毛を挙上したり、アゴを上げて見ようとするため、頭痛や肩こりなどの原因となることがあります。

診断

Marginal Reflex Distance（MRD：瞳孔中心から上眼瞼縁までの距離）を計測し、軽度(3.0～1.5mm)、中等度(1.5～-0.5mm)、重度(-0.5mm～）に分類します。重症筋無力症や眼瞼痙攣など別の疾患が無いかも確認します。

治療

手術により眼瞼挙筋・挙筋腱膜を剥離し、前方に引っ張って瞼板に固定します。必要に応じて余剰皮膚・眼窩脂肪の切除や重瞼作成も行います。

手術は基本的に局所麻酔の日帰り手術で行います。手術翌日からは、創部を含めて洗顔やシャワーが可能です。１週間程度で抜糸をします。術後１～２週間程度は腫れや内出血が続きます。

令和5年11月発行